

重症心身障害児（者）施設で働く看護師のやりがい

かがわ総合リハビリテーションセンター 看護療育部 東病棟

看護師 藤井 麻衣、渡邊 里香、野口 祐佳里、入谷 亮子、西村 かをる

キーワード：重症心身障害児（者）、看護師、やりがい

要 旨

A病棟は、重症心身障害児（者）（以下重症児（者））が多数を占め、療養生活を送るうえでは、医療ケアが必要である。また日常生活のほとんどが全介助であり、コミュニケーションがとりにくい患者が多い。今回A病棟で働く看護師がどのようなときにやりがいを感じているかを明らかにし、やりがいが持てるように効果的に関わっていくための方向性を見つけないかと考えた。結果、総データ38から、22コード、10サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された。看護師は、患者や家族の関わりから〈コミュニケーションが成立したと思えたとき〉や〈関わりから変化を感じたとき〉に【患者の変化の理解や家族との信頼関係で得られるやりがい】を感じていた。また、訴えない患者から変化をとらえ【重症児（者）施設での看護の難しさを理解したとき】に患者の個々の障害から〈起こりうるあらゆる状況を予測できたとき〉その状況に対応できることでやりがいに繋がっていた。そして自己の目標として〈倫理的思考を保つこと〉や『その人らしさの重要性』を持っていた。チームで意見交換や情報共有ができ【チームや自己の目標とする看護ができたとき】にやりがいとなっていた。

1. はじめに

A病棟は、重度身体障害と知的障害を併せ持つ重症心身障害児（者）（以下重症児（者）とする）が入所しており、日常生活のほとんどは全介助であり、医療的ケアを受けている。療養生活は、身体機能を維持し安全と安楽を保ちながら、安心して日常生活が送れるように援助している。看護師は、患者の思いをくみ取ることや、身体の状態の変化を観察しアセスメントする能力が必要となる。また、患者は言語でのコミュニケーションが困難であり、身体機能に伴うさまざまな症状や身体的苦痛や自分の意思を表出することができない。そのような特性がある病棟で、看護師は日々のケアの繰り返しや、ケアに対する効果の分かりづらさや、患者とのコミュニケーションの難しさが重なり、やりがいを見出しにくいと考えられる。

重症児（者）に対するやりがいに関する先行研究で、木村は、異常の早期発見や利用者の能力発見することがやりがいである¹⁾と述べている。また職務満足度に焦点を当てた調査では、渡邊は、重症児施設で働く看護師は、仕事上の人間関係が良好だと認識している人ほど仕事の満足度が高く、やりがいと継続

意思が高い²⁾と述べられている。このほかにも重症児（者）の看護や仕事に対するやりがいの研究がされており、関心が深いことが伺える。

今回、A病棟で働く看護師がどのようなときに、やりがいを感じているか明らかにし、どのようなことを意識的に行えば重症児（者）の看護にやりがいを持ち、働けるか、方向性を見つけないかと考えた。

2. 目的

A病棟で働く看護師がどんなことでやりがいを感じているかを明らかにする。

3. 方法

(1) 研究対象者：A病棟での経験が2年以上の本研究の趣旨に同意・協力を得られた看護師6名

(2) 研究デザイン：質的帰納的記述研究

(3) 研究参加者にはインタビューガイドを用いた半構成的面接法を行う。内容は、重症児（者）施設で働いて、どんなときにやりがいを感じているか、を中心に自由に語ってもらう。

(4) データ収集期間：2020年9月～2020年10月

(5) 分析方法：インタビュー内容から「やりがい」

に対する文脈を抽出し、抽出した文脈を1つの内容で区切り1内容を1データとした。1データ毎に要約、コード化しサブカテゴリーカテゴリー化した。分析にあたっては、研究者間の意見が一致するまで話し合いを重ね信頼性と妥当性を確保した。

4. 倫理的配慮

研究参加者には研究の目的、自由意志での参加であること、研究を断っても、個人が特定される恐れはないこと、得られたデータは本研究以外には使用しないこと、結果を公表する予定であることを書面に用いて説明し同意を得た。本研究は当該倫理委員会の倫理審査を受け承認を得た。なお開示すべき利益相反関係にある企業はない。

5. 結果

A病棟での看護師の平均勤務年数は5年である。研究対象者はA病棟での経験が3年以上の20歳代から40歳代、男女看護師6名であった。分析の結果、総データ38から、22コード、10サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリー【】、サブカテゴリー◇、コード『』、データ「」で説明する。(表1)

(1) 【患者の変化の理解や家族との信頼関係で得られるやりがい】

看護師は、『患者の表情や小さな変化でやりがいを得られる』と感じ、患者との〈関わりから変化を感じたとき〉や〈関わりにより成長を感じたとき〉にやりがいに繋がっていた。そして、『患者の反応でコミュニケーションが取れていると感じられる』ことに喜び〈コミュニケーションが成立したと思えたとき〉にやりがいを感じていた。また患者の家族との関わりから、『患者の代弁者である家族の反応が大事』であると感じ〈家族との信頼関係の大切さに気付いたとき〉家族の思いに寄り添うことでやりがいを感じていた。

(2) 【重症児(者)施設での看護の難しさを理解したとき】

『訴えがない患者を観察、理解する難しさ』や、『小さな変化から患者の伝えを捉えるのが難しい』、ことが挙げられ、重症児(者)の看護の難しさを実

感している。そのため〈起こりうるあらゆる状況を予想できたとき〉に自ら対処できることにやりがいを感じていた。

(3) 【チームや自己の目標とする看護ができたとき】

スタッフは、『チーム内での意見の相違と継続看護の難しさ』、『スタッフの共感と承認されること』などから〈チームでの意見の統一の難しさを理解されたとき〉にチームの中で自己の意見を話し合い認められ目標とする看護ができ、やりがいに繋がっている。また、『スタッフ間の人間関係』や『スタッフ間の情報共有』を充実させることで〈患者の看護に対する情報共有ができたとき〉にやりがいを感じていた。そして、自己では、『生活の質の向上を図るという目標』があることや『ラダーをすることにより目標が明確』になり〈自己の目標の設定〉ができることがやりがいに繋がっていた。さらには、重症児(者)の施設では『高い倫理観が求められる環境』や『その人らしさの重要性』を感じており〈倫理的思考を保つ〉ことも重要となり、それを意識していくことがやりがいに繋がっている。

6. 考察

A病棟では、やりがいをしている看護師と、やりがいを見出しにくい看護師がいることが明らかになった。ここでは、看護師がどんなときにやりがいを感じており、どう関わっていけばやりがいに繋がるかを考察する。

(1) 重症児(者)看護で求められること

重症児(者)の看護では、言語的コミュニケーションを図ることが困難な患者に対して、小さな反応から意志をくみ取ることや身体の変化に気付くことが重要である。看護師は『患者の気持ちを読み取る難しさ』や『訴えのない患者を観察し理解する難しさ』、『小さな変化から患者の訴えを捉えるのが難しい』ことを感じていた。川住は、障害児・者の気持ちや意志への読み取りは、はじめは不確実で誤る可能性があるが、関わりを続ける中で精度は高まっていく³⁾、と述べている。困難を感じながらも患者の気持ちに寄り添い、繰り返し関わることで、対処できる方法を積み重ねることが、やりがいに繋がっていくのではないかと考える。また看護師は『患者の表情や小さな変化が得られる』、『長く関わることで

少しの変化に驚きと喜びを感じられる』など〈関わりにより成長を感じたとき〉や〈関わりから変化を感じたとき〉、〈コミュニケーションが成立したと思えたとき〉にやりがいを感じていた。木村は、利用者の小さな反応に気づくということは、重症児(者)の看護において、異常の早期発見や利用者の能力発見につながり、最も求められる能力であり、やりがいへと発展する。⁴⁾と述べている。浅井らは重度心身障害児の看護の専門性を習得できるよう配慮しその知識や技術を生かせる場の提供を設け看護師の自己実現の向上に働きかけることが現職場での仕事の継続に繋がる。⁵⁾と述べている。患者の障害の特徴を理解し、その専門的な知識や技術を習得できるよう指導していく必要がある。このことから、重症児(者)の障害を理解して〈起こりうるあらゆる状況を予測できたとき〉に、対処できることがやりがいに繋がっていると考える。

(2) 承認される機会の必要性

患者へのケアや看護に対して、患者から言葉での評価は得られにくい。また患者の反応からもはっきりと読み取ることは困難である。そのため患者の家族との信頼関係が重要になってくる。看護師は『患者の家族からの言葉で信頼されていると感じられ』患者のケアに対する反応は『患者の代弁者である家族の反応が大事』だと感じていた。家族との信頼関係が構築されることにより患者のケアや看護に対して承認の機会が得られると考える。また撫養らは、同僚からの肯定的評価や患者からの承認といった他者とのつながりによって支えられている。⁷⁾と述べている。『スタッフ間の意見や思いをまとめる難しさ』があるが職員同士で〈患者の看護に対する情報共有できたとき〉にチームで共有し安心感が実感できる。そして渡邊らは、常にケアの見直しを意識できる定期的なカンファレンスを実施することで看護の専門職としての自覚を忘れない努力が必要である。⁶⁾と述べている。このことから、職員間で患者について、話し合いを重ね、振り返り、評価をし、その患者にとってケアがどうであるか考えることが、必要である。そのような機会を意識的に作り、職員同士で賞賛や承認が得られる努力が必要であると考え。

(3) 目標を持って仕事をする重要性

A病棟では、チームで協働をすることは重要であ

る。〈チームでの意見の統一の難しさと理解されたとき〉に同じ目標に向かいチームでケアしているという思いを実感することができる。チームで目標を共有することが重要であると考え。また、重症児(者)施設では『高い倫理感が求められる環境』である。『その人らしさの重要性』や『生活の質の向上を図るという目標』を持ち『患者の立場に立った考え』ができるように意識して看護していくことが必要で【チームや自己の目標とする看護ができたとき】にやりがいへと繋がると言える。

今回の結果から、重症児(者)施設のやりがいは、【患者の変化や家族との信頼関係で得られるやりがい】、【重症児(者)施設での看護の難しさを理解したとき】や【チームや自己の目標とする看護ができたとき】であることが明らかになった。

8. 結論

看護師は重症児(者)施設での看護に難しさを感じていた。しかし患者の理解や、障害を理解し、専門的な知識や技術を習得でき看護に生かすことができることや、目標を持って看護すること、看護が患者やその家族や、同僚に承認されることがやりがいに繋がっていた。

【出典先】

令和3年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究年報

【引用文献】

- 1) 木村美香：重症心身障害児(者)施設で働く看護師のケア提供に対するやりがい,第41回小児看護, p161, 2010.
- 2) 渡邊美保・北島直美・鈴木寿恵：重症心身障害児施設で働く看護師の満足度に影響を及ぼす要因の検討,第42回日本看護学会論文集 看護教育, p 208-210,2012
- 3) 川住隆一：障害のある子どもとのコミュニケーション、小児看護, 26 (6), 675-681, 2003
- 4) 渡邊美保・北島直美・鈴木寿恵：重症心身障害児施設で働く看護師の満足度に影響を及ぼす要因の検討,第42回日本看護学会論文集 看護教育, p 208-210,2012.

- 5) 浅井直子・山本八千代：重心障害児施設に勤務する看護師の仕事の満足度と現職場への継続意思に影響する要因，川崎医療福祉学会誌、Vol. 26 No. 2 2017
- 6) 渡邊美保・北島直美・鈴木寿恵：重症心身障害児施設で働く看護師の満足度に影響を及ぼす要因の検

討,第 42 回日本看護学会論文集 看護教育, p 208-210,2012.

- 7) 撫養真紀子・勝山貴美子・尾崎フサ子：一般病院に勤務する看護師の職務満足を構成する概念，日看護会誌，Vol. 15.No.1.2011

(表 1)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
患者の変化の理解や家族との信頼関係で得られるやりがい	家族との信頼関係の大切さに気付いたとき	患者の家族からの言葉で信頼されていると感じられる	
		患者の代弁者である家族の反応が大事	
	コミュニケーションが成立したと思えたとき	患者の反応でコミュニケーションが取れていると感じられる	
		コミュニケーションが取れたことによる楽しみ	
	関わりから変化を感じたとき	患者の表情や小さな変化でやりがいが得られる	
	患者の立場に立った看護ができたとき	患者の立場に立った考えができる	
	関わりにより成長を感じたとき	患者の成長で得られるやりがい	
		長く関わることで少しの変化に驚きと喜びを感じられる	
		ゆっくりと児のペースで関われる	
重症心身障害児施設での看護の難しさを理解したとき	起こりうるあらゆる状況を予測できたとき	患者の気持ちを読み取る難しさ	
		訴えがない患者を観察・理解する難しさ	
		小さな変化から患者の訴えを捉えるのが難しい	
チームや自己の目標とする看護ができたとき	チームでの意見の統一の難しさを理解されたとき	スタッフ間の意見や思いの違いをまとめる難しさ	
		スタッフの共感と承認されること	
		チーム内での意見の相違と継続看護の難しさ	
	倫理的思考を保つこと	高い倫理観が求められる環境	
		その人らしさの重要性	
	自己の目標の設定	生活の質の向上を図るという目標	
		ラダーをすることにより目標が明確	
	患者の看護の対する情報共有ができたとき		スタッフ間の人間関係
			スタッフ間の情報共有
看護計画の評価			